

## 音楽にことよせて

小嶋祥三

音楽についての私の経験は貧弱なものだ。私が最初に聴いた音楽は母親の子守唄だったかもしれないが、無論記憶にない。母が時折り歌っていた子守唄から、なんとなく、『江戸の子守唄』だった様な気がする（「ねんねんころりよ、おころりよ・・・」）。通った幼稚園はキリスト教系だったので、キリスト教に関連する歌を歌った。「・・・、馬が啼いて眼が覚めた、眠り給うエス様よ」とか、『もろびとこぞりて』の「主は来ませり、・・・、シュハキマセリ」を歌ったことを覚えている（後者の歌の歌詞の意味を理解していなかったように思う）。小学校は多くの人と同じような音楽の教育を受けただろう。ただし、どの学年で何を歌ったかはっきりした記憶がない。高学年の時に学校の合唱団に入れられて（外で遊びたかったので、あまりうれしくなかった）、平井康三郎作詞・作曲の『合唱賛歌』（「喜びの歌声よ・・・」）を歌ったことは覚えている。『泉のほとり』（深尾須磨子作詞、橋本国彦作曲、「水よ、水よ、きれいな水よ・・・」）を歌ったのもこの頃か。私が通っていた渋谷区立幡代小学校は途中から校歌が変わった。入学した時はその後クラスの担任になった広瀬先生が作詞し、音楽の中島先生が作曲した手作りの校歌だった。一番は「武蔵野原の濃い緑、希望に満ちた朝毎に、文化の鐘を鳴らすのは、あなたよぼくよ幡代の、優しく清い子供たち」とあり、「希望」や「文化」など戦後間もなくの世の中の風潮、世相がでていいる。正式？な校歌に代わった理由は分らない。しかし、私には手作りの校歌の方が鮮明に残っている。また、わらべ歌というのだろうか、「一かけ、二かけて、三かけて、・・・」というのを覚えている。西郷隆盛（の娘）が出てきたりして奇妙な歌だった。明治はまだ近かったのだろうか。

子供の頃はテレビなど普及していなかったもので、ラジオが娯楽の中心だった。『鐘の鳴る丘』、『鞍馬天狗』、『紅孔雀』、『笛吹童子』などのドラマに聞き入った。歌では『里の秋』や『みかんの花咲く丘』といった童謡はよく覚えている（他にもいろいろと歌っただろう）。『里の秋』の歌詞には戦争にかかわることがでてくる。『みかんの花咲く丘』は戦争で母親を亡くした子供の歌だと思っていた。クラスには父親か母親を亡くした子供が何人かいたのだ。そういう子供たちに配慮してか、「母さん」を「姉さん」と読み替えて歌うこともあったようだ。『みかんの花咲く丘』については、新聞がこの童謡の不幸なその後をとり上げていた。当時の童謡の作詞、作曲家に対して、退廃的、感傷的、営利目的との批判があったようだ（文化大革命とか大学紛争の頃の話か）。この曲の作曲者の海沼実は主要な攻撃目標だったらしい。ご本人は1971年に亡くなられているが、憤死という表現がこの記事にはあったと記憶する。このようなことがあったためだろうか、私より一回り下の世代はこの童謡を歌っていないようだ。

論争では、子供らしい心よりも大人に通じる詩情を重視すべきという主張があったらし

い。しかし、いずれにせよ無邪気に歌っていた子供には関係のないことだ。この童謡には母親のことがでてくる。母親に依存して生きている幼い子供の最大の不安は母親がいなくなることだ（分離不安）。子供時代もそして年老いた今でも、三番の歌詞で母親に対する思いが湧いてくる。そういう一般性、普遍性があるように思う（童謡『落葉の踊り』もこの文脈で理解していた。「机の上に忘られた・・・」）。論争の是非を問題にするつもりはないが、感傷的、営利目的などといっても、そのようなことは子供の知ったことではない。この童謡が歌われなくなったことにより、私たちの世代の幼いころの記憶が多少希薄になったと言えるかもしれない。この童謡が否定されると、私たちの幼い記憶も否定された気分になる。これは残念で、さびしく、悲しいことである。論争の当事者たちはこのような子供たちのことを考えていただろうか。童謡がうたわれなくなった後、テレビ番組の主題歌が歌われたそうだ。これが営利と関係ないとどうして言えるのか。どこに大人に通じる詩情があるのだ。

話が横に行ったので、ついでに寄り道をしておく。『いい日旅立ち』ではないが、亡くなった父母が歌っていた歌をよく覚えているし、自分も歌うことがある。父は明治37年、母は大正3年の生まれだった。父は信州・小布施の出身だったので、長野県の歌「信濃の国は・・・」をよく歌った。父が歌っていた歌の歌詞を手掛かりにネットで調べると、尋常小学校唱歌だったりする（「カアカア、カラスが鳴いていく、・・・」、「飛べ、飛べ、トンビ・・・」、「春風吹いて、野山は霞む、・・・」）。『岸の桜』（「岸の桜の花咲く盛りは・・・」）という歌を、東京へ出てきた父は新設の旧制中学（五中、小石川高校）で教わったようだった。父は五中の音楽の教師が作曲したと思っていたが、外国人の作曲らしい。この曲も小学校唱歌に入っている。「流れも速き多摩川の・・・」という歌は五中の校歌だったのだろうか。父親にとって旧制高校（二高、仙台）時代が人生で最も楽しい日々だったようだ。校歌（「空は東北、山高く・・・」）や寮歌（明善寮といった。「山紫に、水清き・・・」）をよく歌っていた。東北大出身のある先生に、父が入っていた寮の話をしたら、「あっ、先輩だ！」と言われた。これらの歌をCDで聴くと、父の歌い方とは微妙に違って面白かった。鉄道の歌も歌っていた。「昨日は松島、今日は上野、徒（かち）にて辿りし昔知らじ、愉快、愉快、汽車の旅路」というのだが…。父はその後東京大学医学部で皮膚科学を学んだ。ある時、教室の歌を作ることになったらしい。郷里が近かったこともあり、父が使者として作曲家の中山晋平に依頼に行ったという。ところが、中山晋平は故郷から歌手志望の若者が出て来たと言っていたと勘違いしていたそうだ。詩人・木下杢太郎（太田正雄）は東北大学の皮膚科の教授だった。東京大学へ転出することになり、父が仙台に迎えに行ったという。その杢太郎の詩に『むかしの仲間』（「昔の仲間も遠く去れば・・・、窓の外の入日雲」）がある。母親はこの詩を歌詞にした曲が好きだった（作曲は山田耕筰）。我が家は戦時中に神奈川県栢生に疎開したが、散り散りになった友達を思いながら、母は大山に沈む夕日を眺めていたそうだ（大山を見ると、私は母親を思い出す）。母はまた川路柳虹作詞、

山田耕筰作曲の『山百合』（「山百合見つけた・・・」）という歌をよく歌っていた。高等女学校で教わったようだった。「見よや、あがるヒバリ・・・」という歌は母が歌っていたのだろうか、それとも父だったか。母は「緑の色濃き森の木陰、・・・、待ちかねたる夏の休みは来る」という歌も歌っていた。女学生の母は夏休みが余程嬉しかったのだろうか。母は小唄をやり、三味線を弾いていた。

先日、青梅街道と中杉通りの交差点で『故郷の空』が流れてきた。スコットランドの人が聴いたなら、妙な気分になるかもしれない。しかし、私には西洋音楽を取り入れるのに一所懸命だった明治時代の人たちの努力が偲ばれる。『故郷を離るる歌』、『故郷の廃屋』、『旅愁』など故郷を歌った詞が多い。父のように信州の片田舎から東京に出てくる人もいる。江戸時代から比べれば、随分と流動性が増したからだろうか。

話を元に戻して続けると、子供の頃はラジオ歌謡をよく聴いた。順不同で『朝はどこから』、『山小屋の灯』、『知っているかい』、『麦踏みながら』、『山のけむり』、『山蔭の道』、『南の薔薇』、『水車小屋の花』、『雑木林に月がでた』、『田舎のバス』などなどである（タイトルだけでは分からないが、他の曲も聴けばいろいろと思い出さるだろう）。中には中田喜直作曲の『雪の降る街を』、『夏の思い出』など、今もしばしば歌われる名曲もあった。『雑木林に月がでた』などを思い浮かべると、戦後復興し始めた頃の世の中の妙な明るさや活気を思い出す。なお、『リンゴの唄』、『異国の丘』、『青い山脈』、『丘は花盛り』なども覚えていたし、『お富さん』、『哀愁列車』、『おーい中村君』、美空ひばりの歌などの流行歌は自然と耳に入ってきていた。『懐かしのメロディ』的な番組に出てくる昭和 20 年、30 年代の歌はほとんど知っていた。中学生の頃はブラスバンド部に興味があったが、不器用なので諦めた。高校時代はポール・アンカ、ニール・セダカ、ユニー・フランシスなどが歌うアメリカン・ポップスなど外国の歌や、『エデンの東』、『太陽がいっぱい』が定番だった映画音楽を主に聴いていた。大学時代はアメリカ（ブラザース・フォアの『グリーンフィールド』など）や日本（『帰ってきたヨッパライ』、『ケメ子の歌』など）のフォークソングを少し聴いた。うたた寝をしていた枕元の深夜放送のラジオから『イムジン河』や『夜明けのスキヤット』などが流れてきたことを思い出す。級友の T.S.君が一度ジャズ喫茶に連れて行ってくれたのを覚えている。演奏していたのはモダン・ジャズだった。ただ、私はディキシーランド・ジャズの方が好きだったように思う。最近会った T.S.君は、私が学生時代にラテン音楽が好きだと言っていたのを覚えていた。そういえば、たまたま聴いたラテンのフルートとボンゴの音に魅せられたことを思い出した。就職後は同僚だった M.S.氏の影響で、由紀さおりの歌を聴いた程度である。倍賞智恵子の歌も好きだった。

ラジオからテレビの時代になっていたが、歌番組を観ることはあまりなかった（それでも、昭和 40 年代の流行歌は結構知っている）。ドラマやテレビで見た映画のテーマ音楽で気に入ったものがいくつかあった。『夢千代日記』、漱石の『それから』（?だったと思う。これらは武満徹の作曲と記憶している）、『あすか』（風笛）、『篤姫』のテーマ曲、最近再放

送していた『シャーロック・ホームズの冒険』の冒頭のチェロのテーマ曲。アメリカとは異なる、ヨーロッパの香りがする（時代も関係するかもしれないが）。映画では『あ・うん』のテーマ曲が好きだった。この映画はカメラの視点？が高く、それも好きだった。下に述べるが、ある時からクラシック音楽を聴くようになった。その後は、周囲の若い人の影響で、フォークソング、ニューミュージック系の音楽をいろいろと聴いていた。部分的に自分の若い頃とダブっていたので、『神田川』、『いちご白書をもう一度』など、懐かしい面もあった。その中で小田和正のつやのある声にはびっくりした。また、これらの歌では、昔の流行歌と比べて、「私」、「あなた」などの人称代名詞が多いように思った。自分（たち）で作詞、作曲して、自分（たち）で歌うようになったからだろうか。新しい映画音楽などでは久石譲のものが好きだ。最近パソコンのラジオや、**Youtube** で音楽を聴いたり（いつの間にか消失してしまうのは困ったものだが）、テレビで「フォレスタ」のコーラスを時折聴いたりしている。

クラシック音楽については、大学生の頃、長兄のレコードでチャイコフスキーの『ピアノ協奏曲第1番』、『交響曲第6番』、『弦楽セレナーデ』その他を聴いた位だった。私は30歳代半ばの2年間（1978年-1980年）、アメリカの首都ワシントンDCの郊外メリーランド州（メリランと聞えた）にあるNIH（国立保健研究所）で研究した。滞米中と帰国後しばらくはクラシック音楽を最もよく聴いた時期だった。滞米中はカーラジオをクラシック音楽専門の局にセットしていた。ナショナル交響楽団の演奏会にDCのケネディ・センター（だったと思う）まで行ったことがある。演目の目玉はベートーヴェンの『ピアノ協奏曲第3番』だった。チェリストでもあるロストロポーヴィッチの指揮だったと記憶している（ピアニストがだれだったか、忘れてしまった）。日本に帰ってからはしばらくの間、朝のNHKのFM放送をラジカセで聴き、気に入った曲を録音し再生して楽しんでいた。これにはこの頃、研究テーマを「霊長類の聴覚と音声」にしていたことが関係しているかも知れない。聴覚や音声の研究者（主に、基礎の研究者。狭い世界だった）と話していると、何らかの形で音楽と関わっている人が多かった。音楽好きの人はもっと若い頃からクラシック音楽に親しむようだが、私はオクテである。その辺りを物語るエピソードを一つ。

アメリカであるショッピング・モールへ初めて買物に行った。助手席で妻が地図を片手に道先案内をしていた。カーラジオのスイッチを入れると、ゆるやかで、優美なヴァイオリンのメロディが流れてきた。私はその美しさにびっくりし、うっとりとし、聴き入ってしまった。車は直ぐにモールに着き、妻と子供は降りて行く。もっと聴いていたかったが、妻子とはぐれてもいけない。私は急いでメロディを頭の中で繰り返し、覚え込んだ。それ以降、その曲をアメリカで聴くことはなかった。私は時折メロディを再現していた。日本に帰ってきて、ある朝ラジオが超有名なヴァイオリン協奏曲を放送していた。そして第2楽章になり、あのメロディが流れてきたのだ。何と！曲はメンデルスゾーン『ヴァイオリン協奏曲』だったのだ。ということは、40歳位になって初めてメンデルスゾーンのヴ

アイオリン協奏曲を最初から最後まで通して聴いたことになる。我ながら呆れた。

日本に戻ってからは特に作曲家や曲を選ぶことはなく FM 放送を聞いていた。バッハ、ヘンデル、モーツアルト、ベートーヴェンから、ブラームス、ドボルザーク、チャイコフスキー、マーラー、ドビッシェー等など、まで。美しいメロディ、親しみやすいメロディの曲はどれも好きになったように思う。それらは多くの人に愛されているポピュラーな曲だった。それらの中でとくに気に入った曲を 2, 3 挙げておく。モーツアルトの『フルートとハープのための協奏曲』の第 2 楽章の美しさにはびっくりした。たしか、映画『アマデウス』で、楽譜を盗み見したサリエリが、このメロディを思い浮かべてうっとりとしていた。ブラームスの『交響曲第 4 番』の第 2 楽章でチェロが奏でる、流れるような第 2 主題も好きだ。好きな作曲家はだれかと問われたら、ブラームスと答えることにしている。ドボルザークの『チェロ協奏曲』も好きな曲だ。ウィキペディアによると、この曲はアメリカ滞在の最後に書かれたそうだ。病気になった夫人の姉に対する思いが込められているという。望郷の思いも募っていただろう。曲の最後に魂がアメリカからチェコに飛んでいくように聴こえる部分があり、それに続くエンディングも感動モノだ(鳥肌が立ってしまう)。

ある朝、ラジオから聴き覚えのあるメロディが流れてきた。それは中学校の音楽の時間に歌ったメロディだった。歌詞がついており、題は『コスモス』だったと記憶している。曲はグルックが作曲したもので、オペラの間奏曲『精霊の踊り』の冒頭の部分だった。そういえば、中学校の音楽室には偉大な作曲家の肖像画が飾ってあった。その中にバッハやベートーヴェンと並んでフォスターがいた。占領していたアメリカに気を使ったのだろうか。話はさらに飛ぶが、民主党政権になり、障害者自立支援法や後期高齢者医療制度の設計?をした T.K.氏が叩かれていた。珍しい由緒正しそうな名前だったので、かれが中学校の級友であることに気がついた。T.K.君は優秀だったが、もう一人非常に優秀な生徒 K.T.君がいた。ネットで検索してみたら、新交響楽団というレベルの高いアマチュアというかセミプロのオーケストラのコンサート・マスターを長く務めており、楽団を中心になって支えていたようだった。私がこのことを知った頃には K.T.氏はコン・マス(というのですね)を辞めており、楽器はヴァイオリンからヴィオラに変わっていた。かれが受けていたインタビュー記事などで、中学生のころからヴァイオリンを高いレベルで弾きこなしていたことを知り、仰天した。K.T.君は物静かな生徒だったが、軽妙洒脱になっていたのにも驚いた。楽団には維持会があり、何かのご縁と、私も 3 年ほど会員になり演奏会を聴きに行った。中学生の K.T.君は量が多くこわい髪をしていたが、すっかりと白髪になってヴィオラを弾いていた。K.T.君は学業優秀、私は注意散漫、精神不安定な単なるコドモだったので、私のことを覚えていないだろうと、かれに会うことはしなかった。K.T.氏がいろいろな機会に書いた文章を読んだが、どれもしっかりとまとまったよい文章だった。かれが楽団を引退したのを機会に、私も維持会を辞めた。短い期間だったが、ナマの演奏を楽しませてもらった。

仕事から話も少ししておく。脳には情動、感情に関係する領域がある。われわれが好きな音楽を聴くと鳥肌が立ったりするが（私はこの傾向が強い。『カントリー・ロード』でも鳥肌が立ってしまった）、情動系が活性化している。それに関連して、脳内には報酬系と呼ばれる一群の神経組織がある。この組織は食べ物などの報酬やそれを予告する刺激に反応する。また、この組織は金銭や賞賛、名声といった社会的な報酬でも活性化する。ところが、好きな音楽もこの報酬系を活性化させる。多くの人が音楽を好み、音楽を追求し続けるのはこの報酬系の活動によるのだろう（「三度のメシより音楽が好き」とか）。さて、ヒトの聴覚系は音楽と言語の両方に利用されている。しかし、主に担当する半球は異なり、言語が左半球優位であるのに対し、音楽は右半球優位である。左半球の損傷で言語障害（「失語」）になるが、右半球の損傷では「失音楽」になり、メロディが捉えられなくなったりする。ここで興味深いのが絶対音感である。幼いころから楽器の訓練を受けると絶対音感保持者になりうる。かれらは音を言語に置き換えることができる。では、絶対音感の保有者は左半球で音楽を聴くのだろうか。通常の相対音感の人は主に右半球で音楽を聴いているようだが、絶対音感の人は左右両方の半球で音楽を聴いているようだった。